

図書館★インタビュー

- ①名前 ②何しに図書館へ？
- ③おすすめの本 or おすすめの図書館スポット
- ④あなたにとってターニングポイントは？

- ①(左)小濱 晃 [2年]・(右)川崎 剛 [2年]
- ②(左)テスト勉強・(右)レポートの作成
- ③(左)個室研究室が集中できておすすめ
(右)池上彰さんの本
- ④ゼミ決めのとき、同じゼミになった人が知識豊富で、自分はこのままではいけない！と思い、ゼミの友達と一緒に勉強を始めました。



- ①吉田 可乃子 [4年]
- ②小説を読み
- ③物語やファンタジーの本
- ④今まさに就職というターニングポイント！現在、内定をもらった会社でアルバイトをしています。



- ①(左)室屋 奈月 [3年]
(右)内田 笑里 [3年]
- ②テスト勉強
- ③友達と一緒に勉強しやすい
ブラウジングホールがおすすめ
- ④(左)お世話になった高校の先生とSNSで繋がり、悩んでいるときに励ましてもらい、私も先生のような教員になりたいと思いました。
(右)最近先生にご指導をいただいたのをきっかけに、進路が明確になり、今は教員免許取得のための勉強に励んでいます。



私の図書館活用術



矢幡 智美(4年)

私が特におすすめしたいのが ILL サービスです。参考したい資料が公立大にない時に、ネットで簡単に現物貸借や複写依頼を申し込みます。また一定の冊数を無料で利用することができたので、大変助かりました。私は卒論執筆時に初めて利用しましたが、資料の一部分だけ読みたいときは複写依頼、全体が読みたいときは現物貸借と、使い分けて利用していました。「申請が難しそう、面倒くさそう」と思って躊躇していた ILL サービスでしたが、利用後は「もっと早くから活用していれば…」と思うほどの大活躍でした。

レポート作成、授業の合間の気分転換、就活、卒論などなど…。私の大学生活の節目には、必ず図書館がそばにありました。図書館を味方につけることで、素敵な大学生活になること間違いなしですよ。



川本 匠(3年)

空きコマがあるけど家に帰る気がないって時がたまにあるので、そういう時に利用しています。普段はゼミの研究に役立つような本を読んだりしていますが、集中力が切れたら閲覧室を歩き回って本を眺めるのがちょっとした楽しみです。決まった分野にしか興味がなくてではなく、タイトルを見て面白そうだなって思った本はよく手に取ったりします。やはり図書館は、歩いて回るだけで未知なことに出会わせてくれるので、ぼーっと本棚を眺めてるだけでワクワク感に浸れます。学術誌みたいに内容が固めの本だけでなく、小説など読みやすい本もあるので、ちょっとした気晴らし程度に来て歩いてみるだけで本を読むきっかけになります。本が苦手な人もまずは本棚を眺めて来てみてください。

INFORMATION

ブラウジングホールの雑誌リニューアル

2019年4月から、ブラウジングホールに配架している雑誌をリニューアルしました。昨年度、学生の皆さんを対象に雑誌アンケートを実施し、その結果等を参考に、購読雑誌の見直しを行いました。アンケートにご協力くださった皆さんありがとうございました。今回、新たに2誌の購読を開始しました。趣味やサークル関連の雑誌も配架していますので、ぜひ、時間の空いた際などお気軽にご利用ください。

Camellia Vol.8

—図書館広報紙—

ターニングポイント
新元号の始まりの春に



【CONTENTS】

- コラム：新元号の始まりの春に・・・P.2～3
- 図書館★インタビュー・・・P.4
- 私の図書館活用術・・・P.4
- INFORMATION・・・P.4

新元号の始まりの春に

2019年5月、平成が終わり新元号が始まります。
この歴史的な瞬間を前に、これまでの道のりや
これからの時代について、思いを巡らせてみませんか。

「改元」に思う日本というクニの これまでとこれから

教授 田宮 昌子
(専門：中国文化論)

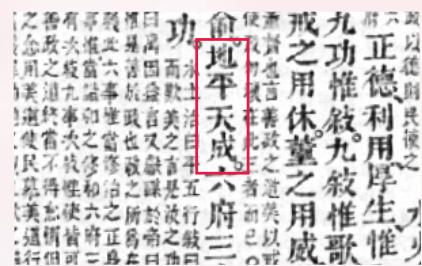
今年の日本最大のニュースは新元号での時代が始まることでしょう。国家と国民にとって間違いなく大きな画期となる出来事です。



元号「平成」を発表する小淵官房長官（当時）
1989年1月7日【写真：共同通信社】

実は、元号は中国に起源を持つ政治伝統です。元号の字句も中国の古典に典拠を求めるのがこれまでの通例です。例えば、「明治」は『易』の「聖人南面して天下を嚮き、明に嚮ひて治む」を出典としています。「南面」とは、伝統中国において、天命を受けた天子が天下を治めることを意味しました。「明に嚮ふ」とは、（聖人が向かうべき）明るい方角（南）を向いて天下を治めるということです。大正は『易』の「能く健を止むるは、大いに正しきなり」（別説有）、「昭和」は『書』の「百姓昭明にして、萬邦を協和す」、「平成」はこれも『書』の「地平天成」が出典とされています。これらの言葉には、道徳的に立派な君主による統治のもとで天下が泰平に治まるという「徳治」の理想が込められています。

以上に登場する『易』や『書』はいわゆる四書五経の一部です。四書は『大学』『中庸』『論語』『孟子』の4種、五経は『詩』



「平成」の出典（『書』『大禹謨』篇）
清・阮元校勘『十三經注疏』中華書局、1979年

『書』『礼』『易』『春秋』（別説有）という5種の古典籍から成ります。これらは日本の弥生時代に当たる前漢期から、国家を運営する理念の拠り所として整理や注釈が始まり、後に「科学」の「テキスト」の役割を果たすようになります。江戸期の武士たちにとっても四書五経は「必修科目」でした。

中国では、皇帝も元号も科挙も1911年の辛亥革命による王朝期の終焉と共に歴史の舞台から姿を消し、それらの基盤であった儒学の「テキスト」四書五経も封建的として批判の対象となりました（21世紀に入り、古典として復権して来ていますが）。

漢字文化圏とか儒教文化圏などと表現される、日本を始め朝鮮半島、ベトナムなど中国起源の文化が及んだ地域の中で、日本は元号が現役である唯一の国家です。古い文物の宝庫としては奈良の正倉院が有名ですが、漢字や天皇制、徳治の発想など…日本では制度や思想面でも中国から文明を取り入れて国づくりをして来た歩みの跡を今日も見ることが出来ます。新時代の幕開けに、日本が歩んできた長い道のりとこれからを考えてみるのも歴史ロマンですね。

変化ある時代、ちょっと情報系の 雑誌でも手にとってみては！

教授 辻 利則
(専門：ネットワーク)

平成5年に開学した宮崎公立大学は、平成6年にインターネットに接続。平成5年は日本で商用のインターネットサービスが開始した年で、県内の民間企業はまだ使っていませんでした。平成7年は日本のインターネット元年と呼ばれ、平成6年にAmazon、平成10年Googleがそれぞれ設立するなどまだ始まったばかりの状況でした。下記にあるのが、その頃、私が作った大学のホームページ（平成8年3月1日に公開）です。素っ気ないですが、教えてくれる人はいないので、何でも自分で勉強して作る時代でした。



大学のホームページ（平成8年3月1日公開）

開学当初から英語教育と情報教育を基本としていた本学は、文科系でありながら情報環境は充実していました。いつでも利用できるコンピュータ室はその当時から変わっていません。英語と情報の講義が同じコンピュータ室で行われるのも他大学にはなかった使い方です。学生も積極的に講義でホームページを作成し、公開していた時期もあります。学生にとっては、大学が唯一のインターネットを体験する場でした。

そして、平成31年、今はどこにいてもスマートフォンでインターネットが使えるようになり、IoT、BD、AIは第4次産業革命と呼ばれ新しい時代を予感させます。ただ、「人工知能は人間を超えるか」の著者松尾氏は、人工知能については過去に2度のブームがあったが過度な期待に答えられず思い描いていた未来は実現しなかったと述べています。世間が技術の可能性と限界を理解せず、過度な期待をしたためということですが、今回の3度目のブームも少しその傾向はあります。新しい元号の時代は、このブームをさらに加速しそうな勢いです。このブーム、これまでと違って「ディープラーニング」というすばらしい技術が中心です。「深い関数を使った最小二乗法」という非常にシンプルな技術なので、松尾氏の本でちょっと調べてみるといいでしょう。

新しい技術が生まれ、大きな変化があると、全く手に負えないと思ってしまいますが、そういうものばかりではありません。ブームに流されないように、やさしく書かれた情報関係の雑誌や本をちょっと読んでみると良いかもしれません。



人工知能は人間を超えるか
ディープラーニングの先にあるもの
松尾 豊 Yukihiro Nishida
角川選書

時をめぐる政治 ～ミシェル・フーコー『知の考古学』的観点から～

助教 清水 習
(専門：公共政策論)

まだ、Octoberが8月で、Septemberが9月であった頃、古代ギリシャにおいて月は十カ月しかなかった。時は流れ、十二カ月が出来たのち、二人の皇帝が、7月と8月を自分の名前に改名した。二人は神になりたかったのだ。

元来、暦とは、政治を抜きに語ることは不可能である。そもそも、「時の流れ」という物理的自然現象に人工的なマーキングをすることが「暦」を作ることであり、それは、「時間の発明」でもあった。そして、政治にとって重要なことは、そのマーキングに沿って、支配下の民衆の日常を形作るカラクリを作り出すことであった。それは、自然現象に従うように、自分たちのカラクリに民衆が従う、神の所業を得ることであり、統治者が神になることを意味していた。



実際、「時の支配」と「宗教」は不可分な関係で発達してきた。「西暦」を基準とした紀元前（BC）・紀元後（AD）の「紀元」とは、キリスト降誕を基準とすることである。このことから、イスラム圏では、異なる暦が用いられているの

も当然であり、宗教や文化的差異から異なる暦が現存していることが理解できる。日本の元号もその一つである。日本独自の元号とは、人の器にて聖地宮崎に降誕された「現人神」である天皇とその子孫達がそれぞれ国を治めていた期間を表すために使用していたのである。したがって、「神」の名のもとに「時」は支配されたのであった。

しかし、現代において、神は人となった。この無神論の時代において、「時の支配」を可能にしているものとはなんだろうか？2019年初頭現在、改元が話題となっている。今回の改元の異質さは、改元の発表が4月であり、執行が5月からであることである。これは、ITプログラミングの移行を配慮してであるが、この配慮こそ、無神論の時代の新たな神の存在と日常のカラクリを垣間見る瞬間ではないだろうか？



知の考古学
ミシェル・フーコー著、慎改康之訳
河出書房新社